



やなぎみわ
神話機械

MIWA YANAGI:
Myth Machines

本展「やなぎみわ展 神話機械」は、2019年2月2日に高松市美術館で立ち上がり、その後1年をかけて4会場を巡回した。本報告書は、巡回先で進化変容を遂げていった新作《神話機械》はじめ、各会場に限った試みやそこから派生した様々な展開について振り返るものである。

高松市美術館

2019年2月2日～3月24日

今回の展覧会では、まず「エレベーター・ガール」に始まるやなぎの過去の写真シリーズ、そして約10年ぶりに取り組まれた新作写真シリーズが並べられた。そしてここ10年間の演劇の仕事に関する資料展示を挟み、最後は新作インスタレーションにより締めくくられた。注目を集めたのは当然ながら、新作の写真シリーズとインスタレーションである。後者は投擲、のたうち、振動の各マシン、そして光と音を発する自走マシンからなり、展覧会構想段階にやなぎからプランを聞かされた時はその前代未聞ぶりに期待と不安が激しく交錯したものである。やなぎデザインのマシンは各地の工学系の学校の皆さんにより製作され、ここでは詳述は省くが、完成に至る道のりは決して平坦なものではなかった。マシンたちが動く「無人公演」が会期中毎日時間を決めて行われ、初日には俳優を入れての「有人公演」も行われた。高松ではどこもない動きだった自走マシンは、2会場目以降見事な成長を果したが、会場ごとに様々に成長や変化を見せながら巡回が続いたことはこの展覧会の大きな魅力であった。

牧野裕二（高松市美術館）

ワークショップ「機械と朗読」

(『ハムレット』と『ハムレットマシン』を読む)

やなぎみわが用意した脚本（ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』第5幕1場（墓掘りの場）とハイナー・ミュラー『ハムレットマシン』等から構成）を、展示室内で読み、《神話機械》のマシンと共演するというもの。

やなぎからワークショップの参加者へ配られた「説明」には、「墓掘りの場」について、「照明もなく陰気なシーンである。それに反して、墓掘りたちの世間話は掛け合い漫才のように陽気で、国政の腐敗への不満を機知に富んだ言葉で表現する。彼らに話しかけたハムレットも舌を巻くほどだ。金メッキされた数多の言葉に対して、庭師、墓掘り、ドブさらいたちの、土の中から出てきたような無一物の彼らの言葉こそ豊穣である（とシェイクスピアが言っているような気がする）。」とあり、また、「シェイクスピアとハイナー・ミュラー。（ハイナー・ミュラーは、無力なオフィーリアをエレクトラのごとく抗う古代の女に転じさせ、ハムレットをマシンにして無力化しつつ延命させた。）この2人の偉大な戯曲家に、私からの提案である。」と記されていた。

参加者は、学生、妙齢の女性、老年の男性と、年齢も性別も様々な、ほぼ演劇無経験の15人。講堂で稽古を繰り返した後、展示室へ移動し、暗闇に灯る小さな明かりの下に円陣を組んで座り、マシンの動きとの間を計りながら脚本を読んだ。観

覧者が作品を鑑賞している中、老若男女の声が、あるときは陽気に骨の主について語り、あるときは戦時下のラジオ放送のような殺気立った早口でまくし立てた。合間に振動マシン「テルプシコラー」がシャラシャと鳴り、メインマシン「タレイア」が妖艶な光を放ち、禍々しいセリフを口にす。光と動きと音が絡まるその光景は実に幻想的で、終了後にはまるでひとつの舞台を見終えたような充足感が残った。

ロボット教室

本展の開催にあたり、今まで交わることのなかった機械工学畑の人々との交流が生まれた。それが、とても新鮮な喜びであったため、この出来事を来館者へも波及させたいという思いから、かつ、子どもたちにも楽しんでもらおうと、《神話機械》の振動マシン「テルプシコラー」を製作した香川高等専門学校高松キャンパス機械システム研究部に協力を依頼し、「ロボット教室」を開催した。高専生が作ったロボットの実演観賞とミニロボットの操縦体験の1セット。エントランスホールには、約150人の親子連れが集まった。

実演に使用したロボットは、2018年度NHK高専ロボコン全国大会に出場したものの、水の入ったペットボトルを転倒させることなく台の上に着地させ、より多くのペットボトルを台に乗せたチームが勝ちというルールであった。台は1メートルから3メートル近くの高さがあり、置くというよりは、まさに、着地させる（飛ばして乗せる）という表現が正しい。出場したロボットは2台あり、ユニークなカエルの顔型ロボットは、秒単位でペットボトルを連射し、もう1台は素早く目的地まで移動した後、1本ずつ丁寧に打ち上げていた。ロボットたちが勢いよくペットボトルを打ち出し、倒さず台に乗せると、会場からは大きな歓声と拍手が起こっていた。

また、高専生が作ったミニロボットの操縦体験では、缶入りジュースサイズの円筒を掴む操作に、真剣な面持ちで挑戦していた。

参加者の中には、「初めて美術館に来た」という方もいて、ジャンルを越境しつつ活動の領域を広げるやなぎみわの展覧会らしい、新しい出会いを生んだ時間だった。

福田千恵（高松市美術館）



【開催イベント】

ライブパフォーマンス『MM』

構成・演出：やなぎみわ
出演：高山のえみ
音楽：内橋和久
①2月2日[土]、②3日[日] 各19:00～／展示室
◎アフタートーク（2月2日のみ）

出演：
やなぎみわ
逸見知弘・根来良如
（香川高等専門学校機械電子工学科逸見研究室）
田村涼一郎
（群馬工業高等専門学校機械工学科ロボット工学研究室）
吉田健・雉子波智・加藤大祐
（福島県立福島工業高等学校）
黒飛忠紀
（マシン設営・『MM』舞台監督）

やなぎみわトークショー
3月9日[土]14:00～15:30／講堂

ワークショップ「機械と朗読」
（『ハムレット』と『ハムレットマシン』を読む）
講師：やなぎみわ
3月10日[日]13:30～16:00／講堂、展示室

ロボット教室
講師：香川高等専門学校高松キャンパス機械システム研究部
3月16日[土]13:00～15:00／エントランスホール

ギャラリートーク
毛利直子（担当学芸員）：2月16日[土]
ボランティアcivi：会期中の日曜日・祝日の各日
各14:00～／展示室

◎写真の撮影：表 恒匡



ロボット教室



ワークショップ



アーツ前橋

2019年4月19日 - 6月23日

演劇プロジェクト『PANORAMA ～パノラマ～』に登場する詩人、萩原朔太郎。そして『1924 人間機械』に登場する詩人、萩原恭次郎。前橋出身の二人の詩人が、やなぎみわと前橋をつないだ。当館では特別に『日清戦争異聞を読む』という映像作品と朔太郎の個人雑誌『生理』を演劇アーカイブから独立させて、〈エレベーター・ガール〉の続きに展示した。『日清戦争異聞 (原田重吉の夢)』という、史実とフィクションを交えて書かれた萩原朔太郎の短編小説を、やなぎの主要モチーフである案内嬢が講談師風に朗読する映像作品に、美術と舞台との往還がすでに初期の作品からはじまっていたことを見て取れた。

ライブパフォーマンス『MM』のアフタートークでは、ゲストに前橋文学館館長で萩原朔太郎の孫である萩原朔美氏と、マシン製作に携わった平社信人氏を迎えた。やなぎは、「デウス・エクスマキナ (機械仕掛けの神)」を例に物語の未完を語り、萩原館長はそれを「非完」と話していた。話し足りなかった二人のトークは、半年後の前橋文学館のトークにやなぎが招待されることで続いた。

今回の展覧会「神話機械」は、まさに「非完」。展示室で演じ続けたマシンたちは5会場を巡回し、さらに場所を変えて進化していく。終わることなく、どこまでも続いていく様子を見続けていきたい。

辻瑞生 (アーツ前橋)

【開催イベント】

ライブパフォーマンス『MM』

構成・演出: やなぎみわ
出演: 高山のえみ
音楽: 内橋和久
①5月17日 [金]、②18日 [土] 各19:30～ / 地下ギャラリー

◎アフタートーク (5月17日のみ)

出演: やなぎみわ
平社信人
(群馬工業高等専門学校機械工学科准教授)
萩原朔美
(前橋文学館館長)

やなぎみわ講演会

5月19日 [日] 14:00～15:30 / スタジオ

ロボット教室

講師: 群馬工業高等専門学校ロボット研究会
5月11日 [土] 14:00～16:30 / スタジオ

ギャラリートーク

辻瑞生 (担当学芸員)
5月12日 [日]、6月1日 [土] 各14:00～15:00
/ 地下ギャラリー



映像作品『日清戦争異聞を読む』の展示



☆写真の撮影: 木暮伸也



ロボット教室



平社信人氏(中央)と萩原朔美氏(右)



会期中にロブソンコーヒーアーツ前橋店で販売した特製デザート「桃と闊腰のパフェ」(手前)

福島県立美術館
2019年7月6日～9月1日

7月から9月までの約2ヶ月間の会期は、今振り返ると本当にあっという間の出来事だった。印象深い事項を思い出すと、桃の撮影に同行させて頂いたことや展示期間のことなど、色々なことが脳裏に浮かぶが、特に刺激的だったのは4台のマシンによる無人公演《神話機械》、有人公演の『MM』、最終日に行ったワークショップ「神話と機械を見聞きする」である。

《神話機械》は会期半ばからは大分安定して動いてくれたが、展示から『MM』までの会期前半は誤動作も何度かあり、無人公演の度にとっても緊張していたのを覚えている。新たな環境(会場)に慣れるまで時間がかかるマシンを見ていると、無機質な機械ではなく、まるで人間や動物のような生き物に近いと思えたのが面白かった。『MM』は、作品が創出されるその時間に関係者の一人として立ち会えたのは本当に感動した。最終日のワークショップは、一番必死だった時間であったが、最高に無我夢中だったからこそ強く印象に残ったイベントであった。特別な一夏の思い出となった。

橋本恵里(福島県立美術館)

色を制限することで、テキストと組み合わせることで、無彩色に置き換えることで、見る側の目の動きがコントロールされる。ノイズが取り除かれていることで、視覚から入る情報は思考へ結びつく。それは《女神と男神が桃の木の下で別れる》、4台のマシンが繰り広げる無人公演でも類似している。

無数の桃の実、複雑な表情を持つ葉や枝、同じものは一つも無い。それに対し、空の色はどこまでも暗く、果てしなく続く一つの無機質な空間のようである。表現された現実が虚構となりつつあるところで、枝受けの支柱はノイズではなく、両者をつなぎとめる重要な存在と感じてしまう。

マシンによる無人公演、必要な光のみを与えることで、展示室という無難な空間のノイズが排除される。公演中に目の前で変化する光、動き、音、それらを反芻する余裕はない。髑髏が粉碎し、マシンが光を放たなくなり、モーターの音が止まった時、反芻から思考が始まる。

大北 孝(福島県立美術館)

ワークショップ
「神話と機械を見聞きする」を終えて

《女神と男神が桃の木の下で別れる》や《神話機械》で顕著なように、近年やなぎみわは、視覚だけに頼ることなく、五感を研ぎ澄ませながら制作していると感じていた。そこで、当館で毎年開催している見える人と見えない人が一緒に作品を鑑賞するワークショップを依頼した。

最初、みんなでやなぎの話しを聞き、展示室で実

際にマシンを触りながら作品を鑑賞。それを踏まえて、やなぎがこのために『古事記』から抜粋して作ったパフォーマンス「黄泉平坂」を、《神話機械》のマシンたちとともに参加者全員で上演するという、創作を含めたワークショップとなった。やなぎの朗読に、参加者は葡萄、桃、セロリやニンジンをかじって音を出したり、鉄板で雷の音、小豆を使って水の流れる音、ナイロン袋をこすり合わせて火が燃える音を作って合わせる。そこにミュージシャンのヤンマー嶋村が、ギターなどで効果音を即興で加えながら、上演を盛り上げていった。最後は、桃担当の参加者が、骸骨の代わりに実際の桃を壁に思い切り投げつけるという究極のパフォーマンス。あたりは桃の甘い香りに包まれ、終了した。

聴覚、触覚、そして味覚に嗅覚、視覚を含めたすべての感覚を働かせながら作品の中に入り込み、体感したワークショップ。見える私にとって、「見る」ということはどういうことなのかを考え、そして闇の向こうに広がっているであろうまだ知らない豊かな世界に思いを馳せた時間となった。

荒木康子(福島県立美術館)

【開催イベント】

やなぎみわトークショー
聞き手: 早川博明(福島県立美術館館長)
7月6日[土]14:00～/講堂

ライブパフォーマンス『MM』
構成・演出: やなぎみわ
出演: 高山のえみ
音楽: 内橋和久
①7月13日[土]、②14日[日] 各19:30～/企画展示室

ロボット教室
講師: 吉田健(福島県立福島工業高等学校教諭)
8月3日[土]13:00～16:30/企画展示室、福島県立福島工業高等学校

触って、話して、見て楽しむ美術鑑賞ワークショップ
「神話と機械を見聞きする」
講師: やなぎみわ、ヤンマー嶋村(ミュージシャン)
9月1日[日] ①10:30～12:00、②14:00～15:30/企画展示室

ギャラリートーク
荒木康子(担当学芸員)
7月27日[土]、8月10日[土] 各15:00～16:00/企画展示室

ケンピ桃マルシェ
会期中、庭園で桃をはじめとする福島の野菜の販売を、GDMふくしま、JAふくしま未来の協力を得て行った。

福島のおすすめ桃メニュー
市内のレストランやバーとともに、展覧会限定桃メニューを展開した。



桃果樹園での撮影下見



ワークショップ



ロボット教室



ケンピ桃マルシェ(左)とやなぎみわ命名カクテル「夜桃香」(右)

演劇アーカイブ(三部作「1924」)の展示



神奈川県民ホールギャラリー
2019年10月20日 - 12月1日

当ギャラリーには、天井高6.5メートルの広い吹き抜けの展示室がある。1階から見下ろせる構造になっており、4台のマシンが動き演じる《神話機械》を様々な視点から見ることができ、この空間を十分に活かした展示となった。また、巡回当初は1点であった《アルゴ船の船首像》は、この展示空間にあわせて新作3点が加えられた。船の先端で波しぶきを受けながら、水平線の彼方を見つめてきた女性の船首像。天地が逆さになった姿は、海底に沈んでいた時代を思わせ、メインマシン「タレイア」の照射によって浮かび上がる姿に、新しい命の宿りを感じた。

ライブパフォーマンス『MM』では、《神話機械》そのものが舞台となり、満員の観客が見守る中、束の間の演劇空間が立ち上がった。鬼気迫る一人芝居で演じきった高山のえみ、音楽の内橋和久ほか、キャスト・スタッフの力を結集させた『MM』は、美術と舞台を往還するやなぎ作品ならではの醍醐味といえるものだった。初日終演後、ドイツ演劇研究者の谷川道子氏と神奈川県立近代美術館館長の水沢勉氏をゲストに迎え、アフタートークを行った。

《女神と男神が桃の木の下で別れる》の展示にあたっては、撮影が行われた福島夜の果樹園のイメージを展示室に持ち込もうと、壁面を黒く塗りつぶした。展示が完成した時、たわに実をつけた桃の木が、妖しく美しく闇の中に浮かび上がり、あたかもそこに黄泉平坂が出現したようで、鳥肌が立った。

森谷佳永（神奈川県民ホールギャラリー）

【開催イベント】

ギャラリートーク
森谷佳永（担当学芸員）
11月9日[土]14:00～15:00 / 展示室

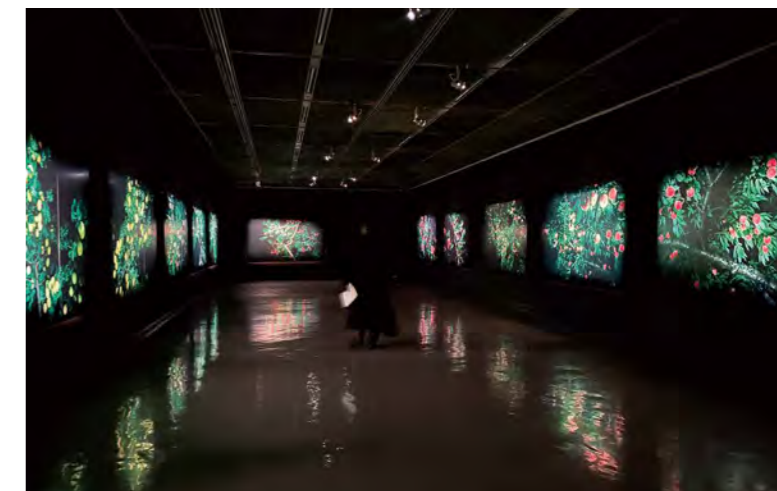
やなぎみわアーティスト・トーク
11月16日[土]14:30～16:30 / 6階大会議室

ライブパフォーマンス『MM』
構成・演出：やなぎみわ
出演：高山のえみ
音楽：内橋和久
①11月29日[金]、②30日[土]各19:30～ / 第5展示室
◎アフタートーク（11月29日のみ）
出演：やなぎみわ
水沢勉（神奈川県立近代美術館館長）
谷川道子（ドイツ演劇研究者）

※写真の撮影：bozzo



1階より見た地下展示風景《神話機械》



《女神と男神が桃の木の下で別れる》



横浜山手中華学校美術科 団体鑑賞
王節子先生と生徒たち



『MM』アフタートーク
水沢勉氏(左)と、谷川道子氏(中央)、やなぎ(右)

《XXXS-XXXL》(2010年、株式会社資生堂所蔵)の展示



静岡県立美術館

2019年12月10日 - 2020年2月24日

当館での展示は《神話機械》から始まるもので、他館と比べると変則的な展示構成となった。《神話機械》の展示空間には、神奈川会場より3点追加された《アルゴ船の船首像》が並び、それまで投擲マシン「ムネメー」による投擲的となっていた仮設壁の内部で上映していた《桃を投げる》の映像は、隣接する展示室で大写しに投射された。当館の施設の特徴としては、展示室の全てに備え付けのガラスケースがある。静岡会場では、このケース内に、《アルゴ船の船首像》や《女神と男神が桃の木の下で別れる》を展示した。重厚なガラスケースや、ケース内外の照度の違い、光を反射するガラス面などが、良い展示効果をもたらしたと思う。また、《砂少女 (SAOTOME)》(IZU PHOTO MUSEUM 所蔵)は当館のみの展示であった。これは、中空に吊り下げられたテントの中に入って、映像を鑑賞するというものである。この作品と〈フェアリー・テール〉シリーズの写真とが、一体となって作品世界を表していた。全体として、作品そのものの魅力もさることながら、やなぎみわの展示手腕が発揮され、趣向の凝らされたものとなった。

植松篤 (静岡県立美術館)

[開催イベント]

ライブパフォーマンス『MM』

構成・演出: やなぎみわ

出演: 高山のえみ

音楽: 内橋和久

①12月21日[土]、②22日[日] 各19:30~

／企画展示室、講堂

◎プレトーク (両日各19:00~)

◎アフタートーク (21日のみ)

出演: やなぎみわ (両日)

谷川道子 (ドイツ演劇研究者、21日)

小松原由理 (神奈川大学准教授、21日)

内橋和久 (22日)

やなぎみわアーティスト・トーク

1月13日[月・祝] 14:00~15:30 / 講堂

館長美術講座(対談)「やなぎみわとは誰か?」

講師: 木下直之 (静岡県立美術館館長)

ゲスト: やなぎみわ

1月26日[日] 14:00~15:30 / 講堂

わくわくアトリエ「機械と朗読」

講師: やなぎみわ

1月12日[日] 10:00~16:00 / 実技室、企画展示室

フロアレクチャー

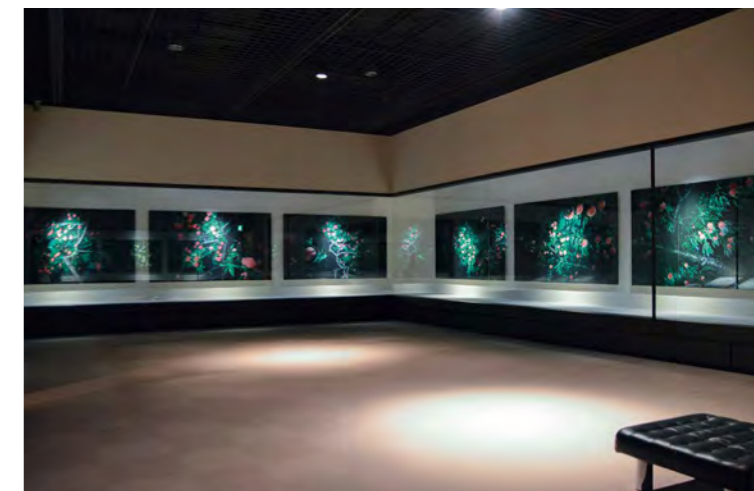
植松篤 (担当学芸員)

12月28日[土]、1月19日[日]、2月9日[日]

各13:30~14:00 / 企画展示室



船首像作品群(奥)



映像作品《砂少女 (SAOTOME)》(2004年、IZU PHOTO MUSEUM 所蔵)の展示





振動マシン「テルプシコラー」の製作に携わって

今回は共同研究という形で、私の研究室の学生である根來良如君と共に振動マシンの開発を行いました。完成した振動マシンは難しい機構もなく、簡単に作れそうに思えますが、多くの制約・条件を満たすために根來君と様々な議論の下、最終形にたどり着きました。

特に苦慮した点は、1年間の長い期間を、自分の手を離れて各地の美術館を巡回するという点です。これに対応するため、壊れにくく、かつメンテナンスし易いマシンを目指し、やなぎさんの構想するロボットを実現しました。結果的に、非常にシンプルな機構ながら、やなぎさんの意向に添えたものができたと自負しております。開発当初は、高松会場を離れた後も問題なく動作するのか？という不安がありました。最終的に大きなトラブルもなく最後まで動き続けた事が最大の喜びです。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった、やなぎみわさんをはじめ、関係するスタッフ、美術館の皆様方に改めてお礼を申し上げます。

逸見知弘

(香川高等専門学校機械電子工学科・当時)

メインマシン「タレイア」の製作に携わって

今回、高松市美術館での展示が開始してからの参加となりました。

はじめ逸見知弘先生からお電話いただいたときは、少しお手伝いするくらいの認識で参加を決意しましたが、予想以上に大きなお話だったと気づき少々驚きました。

しかし、何かのきっかけになるかもしれないと思い、その後1年間にわたってお手伝いさせていただくこととしました。

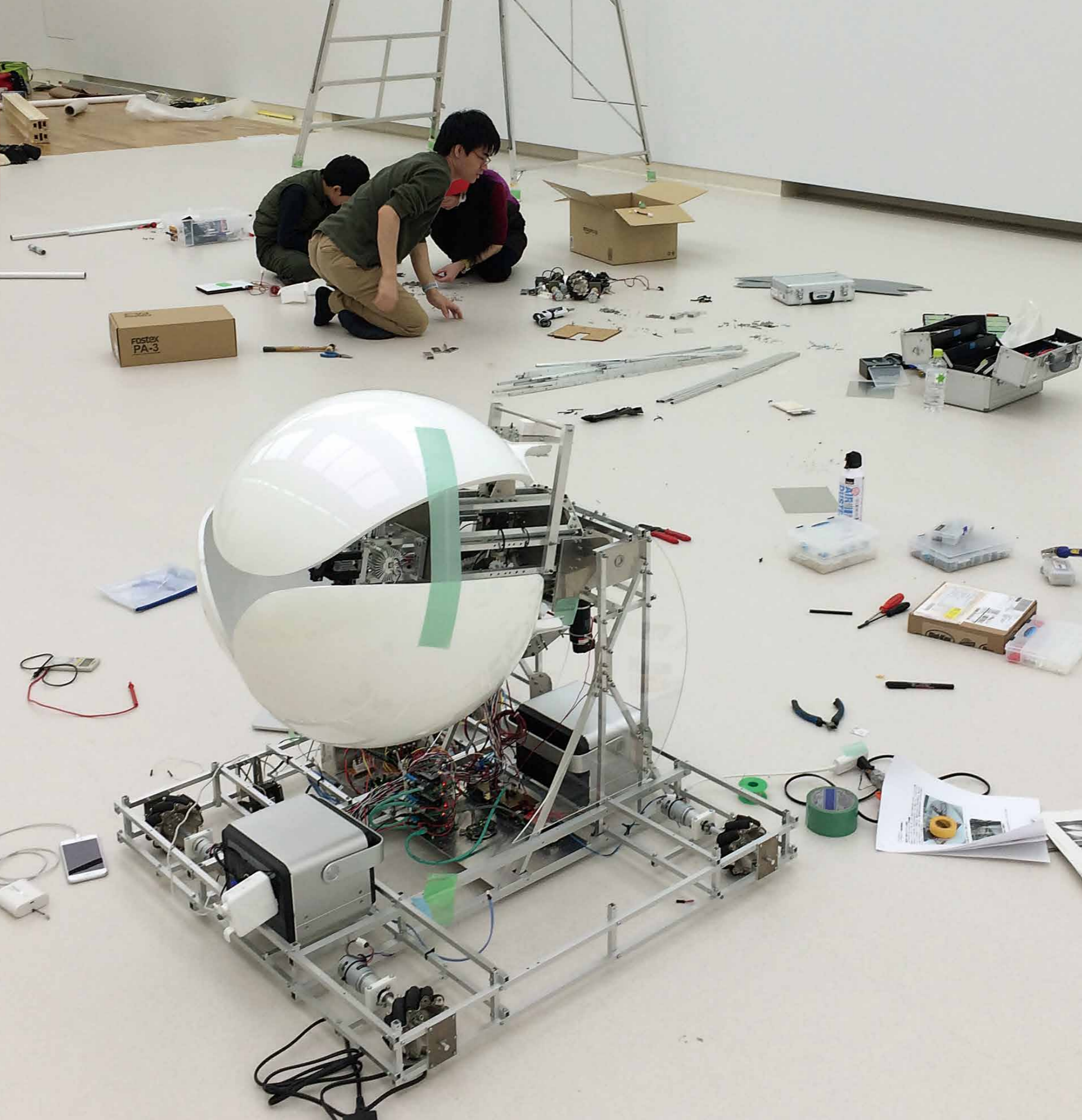
高松展示の後マシンと共に群馬・福島・神奈川・静岡と旅をし、これまで競技参加用のロボットしか作ってこなかったのはかなり違う世界を見て体感することができました。

この1年はとても充実したものだと感じています。

このような体験をする機会を与えてくださったやなぎみわ先生や声をかけてくださった逸見先生、多大なるサポートをいただきました関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

政岡恵太郎

(香川高等専門学校機械電子工学科OB)



のたうちマシン「メルボメナー」の製作に携わって

この度は、縁あって、のたうちロボットの製作を担当させていただくことになりました。今回のような演劇ロボットを設計・製作することは、これまで経験したことのない未知な領域で、不安と期待の入り混じった不思議な感覚がありました。普段、出会うことのない芸術家や学芸員の方々をはじめとするさまざまな方々との貴重な出会いがあり、新鮮な気持ちで設計開発に臨むことができました。普段、高専外の人たちと仕事することがほとんどない学生にとっても貴重な体験になったことでしょう。今回のプロジェクトを通じて、工学は、意外と文学や芸術に近いところにあるものかもしれないと実感することができました。

平杜慎人

(群馬工業高等専門学校機械工学科ロボット工学研究室)



投擲マシン「ムネーメー」の製作に携わって

はじめに、今回の製作に関して美術館から本校の美術教師を通して打診があった時には高校のレベルでもなんとかかなりそうな話で軽く了承してしまいましたが、結果として予想以上の大物の製作になってしまいました。

基本的な機構は解っていても大きなものを約1年間故障しないで動かすということが、一番の課題でした。生徒には実物大の模型を作ってもらい問題点を洗い出してもらいましたが、細かな制御の機構についてはある程度こちらで製作しました。問題になった点は投擲機の固定方法、アームの強度、モーター周りの強度、リレーの故障など様々ありましたが、前橋の展示あたりから動作は安定してきました。

今回は、今までにはなかったタイプの製作過程だったので面白い経験でしたが、苦労も多かった製作となりました。

吉田健

(福島県立福島工業高等学校)

『ハムレット』の批評

境界を超える物語の力

住友文彦（アーツ前橋館長）

『ハムレット』の上演は、2019年10月4日、5日、6日の3日間、東京・アートシエーン（アーツ前橋）で上演された。

演劇制作への軌跡

『ハムレット』の上演風景（2019年10月5日撮影）

やなぎみわの10年ぶりの個展が全国的美術館を巡回している。〈エレベーター・ガール〉のシリーズから始まり、近年の演劇作品は資料や記録映像を使った展示を行ない、最後に古事記とハムレットを題材にした新作を加えている。とりわけ演劇への大きな注力で一見大きく別の方向へ振れたかのように見えた仕事ぶりのなかに、初期の作品から続く確かな連続性が見て取れるのはこの個展の大きな魅力である。

職業のために限定された身振りを繰り返し、制服を着る女性に社会が与えた役割を見事に可視化して見せた〈エレベーター・ガール〉から、徐々にやなぎは同時代の日本だけでなくもっと幅広い歴史や地域において「女性」が果たしてきた役割に目を向けていく。渉猟の対象は文学や映画にまでおよぶ。〈フェアリー・テール〉のシリーズでは古今東西の物語における老女と幼女の役割を丹念に調べ、「砂女」などのキャラクターをつくり上げ、写真や映像によって独自の物語をつくり出した。また、一般人からプロの俳優まで役割を演じる人から発せられる強い個性もやなぎの作品には欠かせない。それは演じようとして生まれるものというよりも、自ずと「役割」をはみ出してしまうような事後的に見出されるもののように見えるが、きっとアーティスト独特の直感で登場人物たちの個性をいつも先回りして見出してきたのであろう。〈マイ・グランドマザーズ〉シリーズのように見事に手の込んだ演出を施した写真作品の場合、むしろその演出効果は鋳型なのではなく、役者の個性をそこから浸み出させるためのようだ。

こうして見ると、写真や映像の作品で試みてきたことはすべて演劇の制作へとつながっていたように思えてくる。それが決して簡単で順風満帆な道のりでなかったと本人から聞いていても、それでもなおそう思える。やなぎが初めて演劇作品を発表した2011年当時は、かなりの驚きを覚えた記憶があるが、そのときは連続性がよくわかっていなかった。しかし、とりわけ自分のなかで強く明確なイメージをつくり上げ、それに向けて多くの調査と制作作業を注ぎ込む彼女のエネルギーは凄まじい。その構想力の強さこそ、アーティストとしての素晴らしい魅力である。ほかの者には容易には掴みきれないほど、壮大な物語性を背後に持つそのイメージを形

『ハムレット』の制作

『ハムレット』の制作は、2019年10月4日、5日、6日の3日間、東京・アートシエーン（アーツ前橋）で上演された。『ハムレット』の制作は、2019年10月4日、5日、6日の3日間、東京・アートシエーン（アーツ前橋）で上演された。

にしていくうえで、多くのスタッフと一緒につくり上げる演劇の手法は、美術家としてキャリアを開始したやなぎにとって必然的な転換によって見出されたとしか思えない。それは今回も同様で、新作のアイデアを理解するのは決して簡単ではなかったが、彼女の確信が結実した作品に、展示室で出会ったときは感嘆した。「桃」の新作は、人間たちが生まれる以前の神々の話である。古事記において桃の木は黄泉の国との境に立っていて、そこで男女の神は決定的な決裂をする。私は池澤夏樹訳の『古事記』（河出書房新社、2014）を読んだが、数々の神が生まれ出る話のなかでもとびきり面白い物語のひとつだ。詳しくはそちらを参照してほしいが、本作は桃の木を下から光を当て撮影した写真が並び、鑑賞者は樹林の中を歩くような体験をする。そして最後に《桃を投げる》という作品では、四足歩行で人間か動物かわからない、かつ男女両方の下着らしきものを身につけていると思しき人物が桃を投げては受け止めるという古事記において語られる二つの異なる役割が混じり合う不思議な映像を見る。古典をやなぎ流に翻案し、異なる対立したものを混淆させる奇跡のようなイメージを生み出している。

悲劇を語る言葉

そして『ハムレット』を解体し再構成したハイナー・ミュラーの『ハムレット・マシーン』を基に、さらにやなぎが書き直した脚本を機械が演じるのが同じく新作の《神話機械》である。最後の展示室で1日3回、機械のみによって「演劇」が繰り返されている。髑髏を壁に投げつけ、それに瓶乾燥器が喝采を送り、悶え続ける肢体が床を這い、その間を英雄的な台詞を響かせるメインマシーン「タレイア」が動き回る。これは人間が滅亡した後の地球で、人間が生み出した機械たちだけが生き延び、その屍を非生産的な方法で弄び、『ハムレット』を演じているという設定だ。ちなみに、これらの機械は最新の人工知能を持っているわけではないし、人類や生き物にもまったく似ていない。だから観客は機械たちが役を演じているようには思わない。そもそもミュラーが物語を解体してしまった時点でこの戯曲は悲劇を外側から照射する装置になり、観客は機械と人間の双方を俯瞰するメタ的な立場に置かれる。その意味で、二つの新作は人類の誕生以

『ハムレット』の上演風景

『ハムレット』の上演風景（2019年10月5日撮影）

前と滅亡以後が設定されていても、人間は不在なのでなく、むしろ濃厚に介在している。桃の作品でも、やなぎは撮影するときに写り込む農家が増えた支柱などを消し去ることはしない。さらに《神話機械》では俳優が演じる「MM」という公演が2日間行なわれた。ひたすら濃密な台詞を喋り続けるひとり芝居を演じるのは性別適合手術を受けた高山のえみで、それに内橋和久の即興演奏が絡まりつく。ウィリアム・シェイクスピア、ハイナー・ミュラー、やなぎみわへと受け継がれてきた悲劇を語る言葉が、普段は話し声がしない展示室を充滿させる。管理を徹底し、永遠に物を残すことを使命としたミュージアムは墓場である。そこが公演準備のために閉まり、やがてギターの弦をつま弾く音が流れ出て、時代を超えた言霊が性差を超えた身体を通して響き渡る。本番までの準備のあいだ、展示室に少しずつ生の気配が漂い始める。二晩の公演も観客と役者や演奏者によって同じものにはならなかった。その場限り、一回だけで消えてなくなるパフォーマンス。永遠の時間を欲望する墓場と一度きりの祝祭の時間がひとつの空間で重なり合う。すべての生に対して暴力的に引かれた、永遠と一時性、ジェンダー、人間と動物、聖と俗などの境界を物語の力によって攪乱し、もうひとつの混淆的な生を想像させるものだった。それは他の演劇作品でも、とりわけ『日輪の翼』において顕著に感じる。

このあと、福島県立美術館などへと巡回していく個展と並行して、10月4、5、6日に神戸の埠頭で再び『日輪の翼』の野外公演を準備しているのだからすごい。自然と機械という人間の知性や管理を超えてしまう可能性を持つものと向き合いながら生の問題と取り組むやなぎの前に、もはや美術だ、演劇だと言う区分は意味をなさない。

* 初出掲載:「アートスケープ」キュレーターズノート 2019年6月1日号

炙りだされた宿命的対立の構造

住吉智恵（アートプロデューサー／ライター）

『ハムレット』の上演風景（2019年10月5日撮影）

やなぎみわの10年ぶりの個展「やなぎみわ展 神話機械」は、2019年から今年にかけて全国5会場を巡回してきた。過去の代表作とともに、『古事記』の桃投げの神話をもとにした新作写真シリーズ〈女神と男神が桃の木の下で別れる〉を展示。また「モバイル・シアター・プロジェクト」の一環として、京都、高松、前橋、福島の大学等との連携により製作された4台のマシンが、ウィリアム・シェイクスピアやハイナー・ミュラーなどの戯曲の場面を人間不在の舞台上で繰り広げる自動演劇作品を発表した。さらにその展示空間で、やなぎの構成・演出、トランスジェンダーの俳優・高山のえみと4台のマシンの共演によるライブパフォーマンス『MM』が上演された。ベルトコンベアに並んだドクロを投げ遣りな感じで壁に投げつける「ムネーメー」。その音に呼応して脊髄反射的に喝采する観客のように振動する「テルプシコラー」（マルセル・デュシャンの彫刻《瓶乾燥器》を思わせる）、ロープで繋がれた手足をバタつかせてのたうつ「メルポメネー」。そしてメインマシンである神話機械「タレイア」はLEDの光を明滅させて動き回り、照明を当て、音楽を奏で、台詞を語りかける。「物語も歌も存在したことがない荒野や氷上に悲劇や喜劇を立ち上げるための試み」とやなぎは記しているが、永久機関のように同じ台詞を精密再生する機械は、思考停止した人間に同調的な言葉を与える“プロンプターマシン”にも、密かにプログラムされた暴走政治を企てる“テロルマシン”にも見えてくる。

唯一の人間である高山は、そのアンドロジナス的魅力を存分に跳躍させ、複数の役を鬼気迫る一人芝居で演じ分けた。『ハムレット』の原作のほか、東西分断時代のドイツで活躍した劇作家ハイナー・ミュラーが再構成した『ハムレット・マシーン』、同じくギリシア神話をもとにした『メディアマテリアル』のテキストが引用される。モノローグは千々に裂かれコラージュされた陰鬱な言葉で埋め尽くされているが、血肉のかような声色と無機質な物音の応酬が舞台上に表出するイメージは、映画『2001年宇宙の旅』や『パッセンジャー』など近未来SFの世界を彷彿とさせ、ディストピアの絶望の果てに乾いたユーモアを漂わせた。

1990年代、若い女性たちが案内嬢に扮する〈エレベーター・ガール〉シリーズでアートシーンに登場したやなぎみわは、2000年代には若い女性が半

『ハムレット』の制作

『ハムレット』の制作は、2019年10月4日、5日、6日の3日間、東京・アートシエーン（アーツ前橋）で上演された。

世紀後の自身の姿を演じる〈マイ・グランドマザーズ〉シリーズで女性のアイデンティティをめぐる既存概念を揺さぶった。やがて彼女の女性性への洞察はジェンダー論を超え、聖俗の境界をも超越した孤高の存在へと向かう。一方2010年には、少女時代に母や祖母に連れられて観た宝塚歌劇以来、関心を寄せていたパフォーマンスアーツに挑戦。それも太平洋戦争開戦前夜の前衛芸術の舞台化や台湾製の大型ステージトレーラーを使った野外劇など、スケールの大きい舞台作品を次々に手がけた。血肉が舞台上に載ることの凄みを背負った一連の演劇プロジェクトにおいて、やなぎの視点は一貫して近過去の歴史を省みることによって、現代の日本社会が抱える問題を熱い批評性をもって照らし出した。

そして平成と令和を跨ぐ本展が終幕を迎えるいま、引き続き美術と演劇を往還するその作品世界は、時間軸や虚実を自在に行き来する強みをどう生かしていくのだろうか。今回の新作では、創作の視点はまだ明確な照準で主題を穿ちきれてはいないが、それでも彼女の関心はこれまで以上に歴史の普遍性と人間の本性に注がれている。

福島の果樹園で夜の桃を撮影した《女神と男神が桃の木の下で別れる》では、男神と女神の決別をめぐるドタバタ劇の神話をモチーフに、1本の樹が雌雄の花をつけ実を結ぶ両性具有的な生命のイメージを立ち上がらせた。有人無人のマシン演劇では、神話や戯曲に繰り返し現れる、生と死、男と女、自然と文明といった宿命的な対立の構造を炙りだす。2つの作品がひろげてみせたのは時空間を特定することのできない、まさに神話的かつ表象的な風景だった。そこには瓦礫ならぬドクロや桃の飛礫を投げつけられ、悲喜劇の連鎖を語り継ぐ神話機械に煽られながら、置き去りにされたカタストロフの死屍累々をただ見つめるほか術のない「歴史の天使」*が茫然と立ち尽くしている。

* ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」参照。

RealTokyo 掲載 URL
（日本語） https://www.realtokyo.co.jp/exhibition/miwanagisoloexhibitionmythmachinesperformance-mm/
（英語） https://www.realtokyo.co.jp/en/exhibition/miwanagisoloexhibitionmythmachinesperformance-mm/



「神話機械」の旅

2019年、高松市美術館から始まった展覧会は、神話を演じる機械たちとともに、西へ北へ東へと、一座のように移動し続けました。美術館で機械たちが、シェイクスピアやハイナー・ミュラー、時には古事記の断片を演じ続けるために、美術館の学芸の皆さんが毎日の開演と終演を取り仕切り、支えてくださいました。久々の美術館での展覧会では、全てを繋げていく動的な姿勢と、その逆を目指す力が、同時に働いていました。この10年の間にたずさわった舞台作品は、他と出会う自らを壊し代謝させる生命活動がそのまま創作になったような表現です。広がっていくとする「動」が機械演劇、定着させようとする「静」は果樹園や船首像の写真作品に結びつきました。夜の桃がフィルムに定着すると同時に古事記の桃投げのパフォーマンスが生まれ、ギリシャ神話のアルゴ船の詩の朗読が船首像の写真に結晶化したわけです。言葉と音とイメージの相互作用は、種が弾けるように新たな作品を生み、「神話機械」の旅は続きます。何処かの地で、きっとまたお会いできますよう。美術館連絡協議会の皆様、各館の学芸員の方々、各校の先生方と生徒達にお礼を申し上げます。

やなぎみわ



やなぎみわ展 神話機械 MIWA YANAGI: Myth Machines

高松市美術館

2019年2月2日～3月24日

主催：高松市美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
助成：一般社団法人さぬき生活文化振興文化財団

アーツ前橋

2019年4月19日～6月23日

主催：アーツ前橋、読売新聞社、美術館連絡協議会
後援：上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA、
まえばしCITYエフエム、前橋商工会議所

福島県立美術館

2019年7月6日～9月1日

主催：福島県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会、
福島民友新聞社、福島中央テレビ
助成：芸術文化振興基金

神奈川県民ホールギャラリー

2019年10月20日～12月1日

主催：神奈川県民ホール〔公益財団法人神奈川芸術文化財団〕、
読売新聞社、美術館連絡協議会
助成：芸術文化振興基金

静岡県立美術館

2019年12月10日～2020年2月24日

主催：静岡県立美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会、
静岡第一テレビ

協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、
日本テレビ放送網（前橋・神奈川のみ）、
JAふくしま未来、JAグループ福島

協力：京都造形芸術大学、香川高等専門学校、
群馬工業高等専門学校、福島県立福島工業高等学校、
京都工芸繊維大学 ROBOCON 挑戦プロジェクト、
一色事務所、堀内カラー
被災地からの発信・心の復興支援事業実行委員会

企画協力：一般社団法人 MIWA YANAGI OFFICE

※ライブパフォーマンス『MM』プロジェクトは、
JSPS 科研費 JP17H00910に関連する作品です。

2020年6月5日発行

「やなぎみわ展 神話機械」報告書編集チーム
デザイン：木村三晴